

双葉新書



札束の軌跡

(検印廃止)

双葉新書 270円

昭和42年11月15日 初版発行

著者 佐 賀 潜

発行者 矢 沢 領 一

発行所 株式会社 双 葉 社

東京都新宿区市が谷田町3の17

電話 東京(268)代表 5111

振替 東京 117299

印刷所 光邦印刷株式会社

東京都千代田区飯田町3の11の18

Printed in Japan

落丁乱丁の場合にはお取りかえいたします(川島製本)

黒の告発書

札束の軌跡

佐賀

潜

双葉新書



FUTABASHA

目次

第一部《政界の黒い病巣を抉る》

戦力なき日本の謀略機関を探る……………六

華やかな贈収賄 “炭管事件” の怪……………六

黒い霧の焦点田中彰治の蛮骨……………六

“黄色いダイヤ” に寄生する利権屋……………七

スチュワードス武川知子殺人の謎……………七

お役人の養老院 “天下り天国” の実態……………八

恐るべき七月豪雨は天災ではない……………九

とばなかつた幻の宇宙ロケット……………九

共和製糖事件に暗躍した黒い力……………六

国会を舞台の大茶番劇のカラクリ……………九

第二一部《この貪婪なるゼニ亡者を斬る》

50億円を詐取した東京大証事件……………二〇

億万の公金横領の道を教えます……………三

株買い占め魔鈴木一弘の恐喝……………三

吹原事件と金権魔森脇のその後……………三

うそつき食品が胃袋を狙っている……………一四

国民に食わせた“病毒豚”七千頭……………	一四
客の株で甘い汁を吸った証券会社……………	一五
国有財産を蚕食する大企業の謀略……………	一六
庶民金融機関のおどろくべき不正……………	一七
脱税天国ニッポンの実態を衝く……………	一八

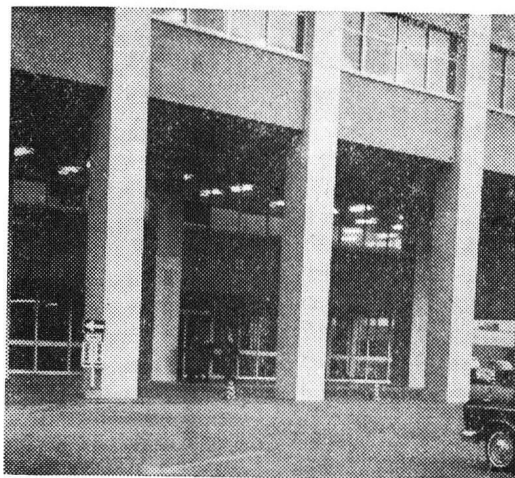
第一部

政界の黒い病巣を抉る



カットは国会議事堂

戦力なき日本の 謀略機関を探る



總理府の六階にある問題の内閣調査室

六月三十日——。

ソ連のハバロフスク軍事法廷で、日本人内河昌富氏（三十一歳）が、スパイ活動をした理由で、重労働八年の刑をうけた。

ソ連側の報道によると、裁判では、内河氏が内閣調査室のために、機密情報収集に当たったとし、さらに内閣調査室が、アメリカと情報を交換している——と指摘してあったという。

このソ連側の発表は、三十日早朝、タス通信が、同日付けのプラウダの記事を報ずる形で流れたらしい。その発表によると、

「内河昌富は、スパイの任務でソ連に渡航、一九六六年十月、ハバロフスクで逮捕された。これは秘密情報を収集中、現行犯でつかまったもので、その際、内河の反ソ活動の物的証拠が押収された」

(一)

この問題について、ソ連側は、詳細については沈黙を守っている。三十日の発表もごく簡単なもので、ソ連が、日ソ関係を考慮し、事を荒立てない政治的配慮だとみられている。

が、新聞がいつせいに書き立てたので、国民は、自分の眼を疑うほどおどろいた。へ今頃、日本にスパイがいたのか、へ政府は、スパイ活動をやらせていたのか、といった疑問を、誰もが持った。

日本国憲法第九条は、明らかに戦争放棄を宣言している。

『日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。』

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない』

スパイは、相手国の軍事機密をさぐるもの——と思

うから、戦争を放棄した我国に、スパイが存在するとはおかしいわけだ。国民の疑問も、ここに根がある。

ところが、タス通信は、はっきりとスパイ——と述べ、物的証拠があると指摘している。しかも判決文に内閣調査室という日本政府の機関の名前を書いてある。

平和国家日本は、国民にかくれて、ひそかにスパイ組織を持ち、各国へその触手をのばしていた——とすると、これは大へんな問題となる。憲法第九条は、厳然として存在する。にも拘わらず、内閣調査室というスパイ活動の本部がある——となつては、一大事だ。

俄然、国会の各種委員会で、野党側から質問の火ぶたが切られた。それに対する政府側の答弁をひろってみると、次のとおりだ。

「内閣調査室と内河さんとは、何の関係もなく、情報収集を依頼した事実もない。委託団体に問題があれば、当然、警告するし、今後とも監督を厳重にする」

大津内閣調査室長の答えだ。

「内閣調査室の仕事は、政府の立てた運用政策に必要な資料、情報などを収集することにある。この収集に当って、目的、手段において妥当でない点があれば改めるが、こうした情報収集は、各国ともやっており、国際慣行に違反しない。」

政府としては、思想、言論統制にふれることのないよう嚴重に指示しており、また、他国の法律慣行に違反することのないようきびしくいましめている」

これは、木村官房長官の答弁である。

「海外情報の収集については、各国で公然と発刊している新聞、雑誌などの収集のほか、外国から帰った話をきいている。資料提供者には、食事や価値ある情報については、現金を払っている。」

政府としてはこうした方法以外に、外国の情報収集する道はない。今後とも、こうした方法を予算の範囲内ですることは、やむを得ないことだ」

以上は、田中法務大臣の答えだ。

参院外務委員会で、三木外務大臣は、大要次のよう

な答弁をした。

「ソ連は、内河氏が五年前まで世界政経調査会にいた前歴と結びつけて、ソ連刑法第六十五条の諜報行為として処罰したもののようだ。」

世界政経調査会に問合せたところ、内河氏にそのような情報収集を依頼した事実はないとのことだった。が、こういう時期に、容疑をうけるような日本人がいたことは全く遺憾である。再び、疑いをうける日本人が、出てこないことを希望する」

三木外務大臣は、訪ソを目前に控えていた時期だったので、内河事件に神経を使っていたようだ。

社会党の穂積七郎、堂森芳夫、猪俣浩三氏らは、衆院の外務委員会で、政府側を追及したが、その要旨は次のとおりである。

「共産圏への旅行は、パスポートが出る段階で、嚴重に審査される原則だが、時期はずれの観光旅行なのに、許可したのは、彼の目的を知ってのなれあいではないか」

「政府は関係ない——と強調するが、スパイが出かける前に、所属機関をやめるのは、徳川時代からの習慣だ。いろいろ問題を起す内閣調査室を、廃止するつもりはないか」

時期はずれの観光旅行。政府と内河氏となれあい。内河氏は、出発する直前、所属していた世界政経調査会を辞めているが、これは、スパイの慣行、ときめつけている。

つまり、これらの追及は、内河氏をスパイとみる前提に立っている。が、政府は、スパイ性を否定し、政府とは無関係だった——と答え、平行線に対立しているわけだ。

内河昌富氏は、果して、日本政府のスパイだったのだろうか。

(二)

内河昌富氏とは、どんな人物か、その足跡を追って

みよう。

彼は、長野県の中学を出ると、天理市に住む伯母を訪ね、伯母の紹介で、魚屋へ住込み店員となった。昼は店員として働きながら、定時制高校を出たというから、勤勉な青年だったことが判る。魚の配達をしながら、いつも、ズボンのポケットに、英語の辞書を入れていたという。

定時制高校を卒業すると、天理大学のロシア語科へ入学した。昭和三十六年春、中の上くらいの成績で、ロシア語科を卒業し、その年の六月、世界政経調査会へ入った。

四年後、結婚し、目黒に住んでいる。子供はいないようだ。世界政経調査会は、東京・赤坂の信和ビルにある。同会は、内閣調査室から、年間二億円前後の調査費を支給され、情報や資料を集め、これを内閣調査室へ提供している。つまり、内閣調査室の下請け団体である。

この会の仕事は……

一、資料の翻訳、海外旅行者から、外国情報を聴取すること、

二、中近東諸国、ヨーロッパ、香港へ調査員を派遣し、資料を集めること、

などのようだ。調査員は四十人、事務員が二十人勤務しているといわれている。内河氏は、この調査会の第四部に所屬し、ソ連の新聞、雑誌の翻訳を担当していたらしい。第四部というのは、共産圏諸国の文化と国民生活を調査するところ——だそうだ。

調査会の責任者は、

「内河さんは、昨年八月、一身上の都合でやめてから、調査会と関係なく、こんどのソ連旅行にあたっても、情報収集を頼んだことはない」と、否定している。

国会で野党側の委員が、「スパイが出かける前に、やめていくのは徳川時代からの慣行だ」と言いきっているが、調査会を退職してから出発したのは、スパイの常套手段だったのだろうか。

調査会と内河氏との関係について、過去にも、奇妙なことがあった。昭和三十九年四月から八月まで、内河氏は、水産庁の北洋鮭鱒漁業監督船、第三利丸に通訳として乗りこんでいる。

この監督船は、ソ連側とごたごたが起きたとき、連絡の役目を果すものらしい。昭和四十一年の四月から八月まで、つまり二度もこの船に乗りこんでいる。その間、調査会の職員はそのままだったというから、おかしい話だ。そんなことから「調査会の了解のもとに、水産庁の船に乗り込んだのだ」という見方も生れている。

このことから、今度のソ連行も、いったん退職しているが、その実、調査会のヒモがついていたんだ——という人もある。

ことにおかしいのは、渡航の時期だ。

八月に渡航の手続きをしているが、シベリアの冬は駆け足でやってくる。十月ともなると、零下十五度もの厳寒の季節がくる。観光旅行らしくない疑問が、生

れてくるゆえんがここにもある。

季節はずれのシベリア、外蒙を独りで歩くのは危険でもある。彼の渡航申請書によると、出身学校の欄に、大阪外語大学となっており、職歴として、昭和三十七年三月から現在まで、武田洋行株式会社勤務——と書いてあったという。

大阪外語大学卒業は、明らかに嘘だ。武田洋行というのは、内河氏の親戚にあたり、ポールペンの卸問屋をしている。ポールペンの問屋さんと、ロシア語が出来る内河氏とは、どう考えても結びつかない。

内河氏の外遊スケジュールは、次のとおりとなっている。

十月十九日——。横浜港をソ連船バイカル号で出発、途中、モンゴルのウランバートルに四日間滞在、イルクーツク、ハバロフスク、ナホトカを経て——、

十一月十三日、横浜帰着となっている。

寒さのまったただ中を、なんの観光なのだろう——との疑問が湧く。内河氏は、十月二十二日、ハバロフス

クへ着き、六日目の二十八日に逮捕された。そのとき、携帯していたオリンパスペン・カメラで、七百コマの撮影をしてあったと伝えられている。

ソ連側のいう「物的証拠」とは、この写真撮影をいうのだろう。六日間で七百コマということは、毎日百コマ以上も、シャッターを切ったことになる。普通の観光客としては、いささか異常だ。日本なら、撮影おこまいなしたが、ソ連は、特にやかましく規制している。

日ソツーリストビューローの旅行案内によると……「撮影を許可されないものは、空港、飛行機からの撮影、軍事的性格の対象物、水力発電所、港湾、鉄道の分岐点、トンネル、鉄柱、地上展望図、国境から二十五キロ地帯」

と、明確に印刷されている。

内河氏ほどのソ連通なら、この撮影禁止を知らないはずがない。それにも拘わらず、なぜ、七百コマもの撮影をしたのだろうか。

ソ連は、写真撮影に、神経を尖がらせている。日本の旅行者が、ロシア美人を写したところ、そばに小さな橋があったので、カメラを取り上げられてしまった。橋は、撮影禁止——だからだ。

カメラからフィルムを取り出し、現像したところ、ぞんぶ女の姿ばかりだったので、スパイ容疑が晴れたという話がある。

こんな風に見てくると、どうやら、「内河昌富氏は、スパイだった」という判断が出てきそうだ。

(三)

話は古いが、昭和三十四年五月、内閣調査室が、中国を訪問する使節団に随行する記者に、情報収集を依頼したという問題が起きた。

依頼事項は、「誘導兵器、ジェット爆撃機の有無」など、軍事、経済、交通など十数項目にわたる事項の、情報収集依頼だったといわれている。

その記者は、(1)、中国における日本人記者の活動を困難にする。(2)、日中両国の友好関係を阻害する。との理由から、内閣調査室へ、文書で抗議したことがあったという。

もとより、真偽は不明だが、もし事実だったとしても、これをいわゆるスパイ活動と、判断していいかどうか疑問だ。

いったい、スパイ活動は、情報収集とは本質的にちがうものだ。どこの国でも、外国の情報収集はやっている。相手国の国情が判らなければ、外交政策を立てることができないからだ。情報収集は、公刊された印刷物や、国民生活の実体、経済の実状などから、分析される。

ところがスパイ活動は、相手国へ潜入し、国籍をいつわり、氏名年令をごまかし、相手国の言葉をたくみにあやつり、機密を掴んでくる。相手国の国民を買収し、間接的にキャッチする方法と、自分の眼でたしかめる方法とがある。

その典型的な姿が、007やナポレオンソロである。日本で有名なのは、ゾルゲである。ゾルゲは、ソ連のスパイだった。ゾルゲは、大東亜戦争のまったただ中の日本軍が、北へ向うか、南へ進軍するか、日本の最高の機密を掴んで、ソ連へ、「南進」を打電した。

ソ連は、ゾルゲの打電によって、ソ満国境の兵力を、西へ進め、対独反攻作戦に変えたといわれている。本格的スパイが、成功した事例である。

僕の知合いに、戦時中、陸軍のスパイをやっていた男がいる。現在、レストランのボーイ長をやっているが、そのYという男は、ソ連側のスパイに接し、ソ連の動向をキャッチする役割を演じていた。が、ソ連側では、Yが日本軍のスパイであることを看破し、あべこべにソ連のスパイに抱きこんでしまった。

Yは、ダブルスパイを演じていたが、結局、日本の憲兵に見破られ、軍刑務所にはうりこまれ、終戦になってやっと釈放された。すると、面白いことに、Y

は、米軍から誘われ、終戦直後の、日本の機密を、米軍へ提供する仕事を担当するようになった。米軍では、彼のスパイ性を握っていたのだろう。

戦時中、日本は、陸軍中野学校で、スパイを養成していた。僕の友人に、その学校の出身者で、三年間も蒙古へ潜入していた男がいる。蒙古娘と夫婦となり、蒙古の風習にとけこみ、機密を探り、通報していたのだ。

こういうスパイからみると、内河氏は、だいぶ趣きがちがうようだ。が、内河氏を、米国のCIAと結びつけて考える人もある。CIAは、ぼう大な予算を使い、全世界へ調査マンを派遣し、情報収集をやっている機関だといわれている。

「まず、内河氏の調べが、去年の十月から、今年の七月まで、長期にわたっているのは、CIAとの関係を調べていたんじゃないか」

と、情報通のE氏はいう。

その根拠として、内閣調査室は、米国のGHQが行

っていたスパイ機関を、日米講和条約締結後、日本が引き継いだものだからだ——という。だから、内調はCIAとよく連絡を取った上で誕生したもの——といっている。

がもちろんこれは、推定の域を出ていない見方だ。また、内河氏は、ソ連の諜報機関の謀略にはまったんだ——という人もある。

その根拠として……

「ソ連は、スパイの獲得を狙っている。終戦後、約五十万人の日本人が、満州、カラフトから帰ってきたがかなり多くの者が、スパイに仕立てられて、帰国後活動している。ソ連の情報機関は、スパイに仕立てるため、外国で工作し、さらにソ連に誘導することもある。だから、カメラを担いで、観光旅行中の内河さんを、引っかけることくらいわけないことだ」

と、述べている。

以上のとおり、各方面の意見を整理してみると次の三通りになる。

一、内閣調査室が頼んだスパイ説

二、米国のCIAのスパイ説

三、ソ連の謀略説

それでは、内閣調査室を覗いてみよう。

内調は、首相官邸の筋向いの、総理府の六階にある。ひっそりと静まりかえった役所で、室長以下七十一人の人が働いている。国民は、内河氏の事件が発生するまで、内調の名前も知らなかった。

内閣法という法律が、調査室設置の根拠だ。その任務は、

一、内閣の重要政策に関する情報の収集及び調査に関する事務

二、各行政機関の行政情報の収集及び調査であつて内閣の重要政策に係るものの連絡調整に関する事務

と、なっている。情報収集調査——とある表現からは、スパイ活動の本案本元という解釈は出てこない。

その組織を眺めてみよう。

内閣総理大臣——内閣官房長官——内閣調査室長——

―次長―調査官、とつながっている。室長は、各省の局長クラスの地位だ。しかも、いかにも規模が小さすぎる。内調自体の年間の予算は、数千万円にすぎずその活動は、次の三種類となっている。

一、調査室自体が行うもの

二、関係省庁との連絡調整

三、民間への調査委託

問題は、民間への調査委託だ。話題にのぼった世界政経調査会へ、本年度は、二億一千万円の委託費を出す予定になっている。そのほか十団体へ、調査をたのみ、それぞれ委託費を払っている。その団体の中に、共同通信社や、NHKもある。この委託費の合計が、年間で六億数千万円である。これで、果して、スパイ活動を行っている―といえるだろうか。余りにも、規模も金の額も貧弱すぎるではないか。

我国に身近な外国の諜報活動は、目をみはるほど歴大な組織を持っている。米国のCIAは余りにも有名だが、ソ連のKGB、中国の党本部の社会部などどく

らべると日本の内閣調査室は子供だましの感がある。どうやら、内河氏の旅行？も、興信所の調査の程度のような気がする。ハバロフスクの町で、白昼、堂々、カメラのシャッターを切るスパイがいるだろうか。スパイなら、隠しカメラを使つたらう。そして、無電の発信機くらいは持っていたらう。

しかも、内河氏は、渡航に際し、本籍住所氏名を本当のことを書いていた。ウソは、卒業した学校名と、武田洋行への勤務中と書いたことだ。が、いずれも、いい大学を卒業したとウソをいう場合もあるし、無職と書くよりはいさいがいいから、書いたとみられぬこともない。本当のスパイなら、国籍すらウソで書いてしまふだらうし、奥さんとも離別した形式をととのえていくだらう。僕は、内河氏をスパイとはみない。そんな間の抜けたスパイは存在しないからだ。

「彼は、スパイの行為をやつたのだ。おそらく、誰かから、ハバロフスクの写真を頼まれたのだらう。のんびり写していたのさ」